

令和四年五月五日(木)

今日は久々に青少年センターでの
対面句会を実施した。

志村 良知

緑さす逆さ里山沢辺の田

櫛大樹葉色定まり立夏かな

七年忌の母の居る寺手毬花

禍事(まがごと)を転ぜよ福に皐月風

遠富士や斑際立つ立夏かな

首藤 しずを

青空におにぎり二つ豆の花

晩春の岬や野馬のふとき尿(ばり)

夏立つや浅瀬に鯉の口をあけ

転がって北へ赴き青田風

とろとろと木香薔薇の目に重し

浜口 須美子

寝転んでこの夏空を独り占め

人知れず家出は五分春の月

宴果て帯も絡まる春の嘘

春の風ブルーやピンクちひろ展

水晶の虹色ブリズム夏来る

森田 元斐

燕来るおかげ通りを我物に

日の丸のひとときわ白し夏立つ日

七転びまた起き上がり初幟

大杉や大神宮に夏来る

千木高し伊勢の若葉の萌ゆる朝

新田 ゆふき

七十の老いに転機や時計草

躑躅垣紅白の布垂らしたり

暮れやらぬ駅のホームや夏立ちぬ

青々といつか帳の立夏かな

白き腕通す半袖夏立ちぬ

高橋 由紀子

キャンプ嬉し子ら転がりて芝まみれ

シネマ館出れば異国や青葉風

夏つばめせわしや雨のアーケード

夏暁の残月鳥の飛び交ひぬ

川沿いのカフェも賑はふ立夏かな

大津 そうかい

春秋やホモサピエンス進化なく

露路裏の木魚の響夏来る

囀や老いて寝転ぶ城の草

八重桜むしやと食べたし見詰むれば

久闊を叙し新緑のカフェテラス

長尾 進一郎

水張りし田に白き鷺立夏かな

早苗田を見回る媼足軽し

夏めくや旅行ガイドを斜め読み

寝転べば雲の眩しさ夏兆す

世の中の争ひ他所に池の蜷

安藤 晃二

操車場覆いつくすや月見草

夏立つやネモフィラ震るる苑広し

大外刈り七転八起夏稽古

ブルーボネット咲きテキサスを染め夏来る

夏来る子ら縁を蹴り庭に跳び

中村 晃也

シャネルよりオーデオロンが良いんじゃない

走り根の熊野の古道夏立ちぬ

病窓よりメーデーの歌遠く聞く

夏来たる水玉模様のワンピース

草萌えや自転車のを追ふ土手の風

内藤 まりこ

白き頬鏡に映す立夏なり

トイレにも鈴蘭飾り友を待つ

蛙鳴く窓辺で読書雨の午後

水鉄砲転んで濡れて泣き出す子

ジャスミンの細き花筒香放つ

宮原 凪

自肅中髪をシヨートに夏立ちぬ

青き海舌に転がしマスカット

囀りや枝にそよげる高さより

茶柱の立ちて嬉しき風五月

春光やシヤガールの馬宙へ跳へ

西川 知世

傾ぎある地球の自転麦の秋

公園の蛇口上向き夏来る

サイフォンの底を舐める火雷の夜

戦争の言葉を卓に夏は来ぬ

ステンドグラスの日差しが靴へ夏始

次回は令和四年六月二日（木）、

兼題は志村良知さん出題の「百合」一切、

席題は西川知世さん出題の「光」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

百合は西欧ではマリア信仰と深く関わる純潔・清浄な愛のシンボルの花。日本では江戸俳諧に、夏山の中の花として句が残されている。山百合、鬼百合、姫百合、笹百合…懸崖に咲く鹿の子百合は土佐では滝百合と呼ばれる。これらの野生種か

ら、現在は園芸種鉄砲百合に代表される多種多色の百合が五月の花舗を飾る。

長谷川權の『季語の言葉』の解説の興味深い工ピソードを紹介する。

百合はもともと南半球にはなく、北半球にだけ自生していて、戦前に大量の鉄砲百合の球根が欧米に輸出された。それまでは、南フランス原産の純白のマドンナ百合が聖母マリアの祭壇、キリスト復活のシンボルとして祭礼に使われていたが、以降、病気に強い鉄砲百合が市場を席捲した。

ひだるさをうなづきあひぬ百合の花

支考

百合の花朝から暮るるけしきなり

一茶

ゆりあまた東ねて涼し伏見舟

黒柳召波

百合の香や披と待つ門の薄月夜

永井荷風

ユリの花超然として低からず

高屋窓秋

蜘蛛の糸一筋よぎる百合の前

高野素十

ためてあし言葉のごとく百合ひらく

稲垣きくの

あかつきの白百合ばかり揺れてをり

中川宗淵

百合匂ふおのが匂に倦みしごと

後藤比奈夫

駅員の一卓の百合海へ向き

能村登四郎

起ち上る風の百合あり草の中

松本たかし

百合ひらき甲斐駒ヶ岳目をさます

福田甲子雄

頸あをき少年と対す百合の前

石田波郷

見おぼえの山百合けふは風雨かな

星野立子

偽りのなき香を放ち山の百合

飯田龍太

ユリの薬いのちのはじめ濡れてあし

正木ゆう子

一桶の鉄砲百合はみな蒼

長谷川權